

愛知サークル1月例会報告

2020年1月5日(日) 桜花学園大学 森川研究室 参加9名
2020年1月19日(日) むらさきかん 参加：6名

<1月5日(日)>

特別例会として、教材解釈一本に絞り「あいしているから」を解釈と展開案検討をまる一日かけて行った。浜松からも3名参加した。

<1月19日(日)>

I 「文学教材」の追求

① 「あいしているから」

1月5日に教材解釈したので、共通教材として4名が実践した。実践途中の記録(2本)と映像(4本)を検討した。

○二場面と四場面。「だって、あいして いるんだもん。」という同じ理由で、二場面では、「こつりを はなしてやりません。」で、四場面では「こつりを はなして やりました。」と、真逆の行動をしている。ここは、1年生から4年生まで、気づくところである。これを大問題にして、どう進めるかが難しいところであるが、一場面はAの愛かBの愛かと記号化してしまうと中身が分からなくなってしまう。すべては、大問題を解くために、どこを解き、どこを結んでいくか、必然性が出てくるように展開させることが求められる。

○協同で解釈はしたが、自分の学級の実態に合わせて授業場面の解釈をもって授業に臨む必要がある。ややもすると、実態に合わない解釈でルールを突き進みがちになる危うさがあることに気付かされた。

○子どもたちのいい発言を教師が気付いて、それを整理してやると対立問題を全員で解決できそうなのにやっていない。授業展開を事前に構想し、子どもから出てきたときにタイミングよく拾えるように構えている必要があることを映像から学んだ。

② 「モチモチの木」(3・4年)記録・映像

○石井先生の介入により、授業の軌道修正が行われていた。子どもの思いつくままの発言に振り回されなくて、単純明快に交通整理がされていく映像を目の当たりにした。何が解決したい問題なのか、すごい異常なこと、ありえないことは何かに戻って確認することで分かりやすくなるのが映像を見るとよくわかる。授業者になったときに、その明快さが揺れないようにすることが求められると思った。

II 「表現教材」の追求

① オペレッタ：「手ぶくろをかいに」(2年)映像

○言葉がはっきりしていて、声に明るさがあり70人の歌は迫力がある。

○場面によって、一人一人の動きが立っているところとそうでないところとばらつきがある。舞台の使い方も、制限がある中でもまだまだ工夫の余地はある。教師の演出力が鍵であると再確認した。

② 紙版画「にらめっこのかお」(1年)

○もっと概念崩しができる余地がある。ポイントは目である。

③ 描画「空と植物」(3・4年)

○秋空と植物を両立させたいが、植物に物の実在感をもたせるには絵具の色が薄い。

④ 「夕景の木々」「自画像」(4年)「くつ」(5年)

○教師に教材のねらいが分かっていない。何を表現させたいのかという動機が弱い。